

オケのテイキは、 おもしろい レポート

2014年5月東京定期版

オヤマダアツシ (音楽ライター)



マイケル・スペンサー(コミュニケーション・ディレクター)

■テーマはラヴェル、まずは歌うことから？

5月17日の土曜日、サントリーホール内にあるリハーサル室の扉を開けると、中からは楽しそうに談笑する声や突然の歌声が聞こえてくる。そこに集まっているのは約30人ほどの大人たち。日頃から日本フィルの音楽に親しんでいる定期演奏会の会員を中心に、数人の楽員やスタッフの方たちだ。

その中心にいて、ラフな普段着なのにちょっとしたオーラを放っているのが、この3月から日本フィルの「コミュニケーション・ディレクター」というポストに就任したマイケル・スペンサーさん。これまでも国内外で多くの音楽ワークショップを行い、その新鮮な発想や綿密にプログラミングされたストーリーで、驚きに満ちた雰囲気を作り上げてしまうマジシャンである。実は筆者も数年前にストラヴィンスキーの「ペトルーシュカ」をテーマにしたマイケルさんのワークショップを拝見し、日本語の歌詞が当てはめられたメロディをい

まだに鼻歌で歌ってしまうほどインパクトを受けたのである。さて、今日は……。

現場に足を踏み入れてみると、いきなり「最初にみんなで歌ってみましょうか」というフレンドリーな声に誘われ、そこにいる全員が短いフレーズを大きな声で歌う(筆者もつられて歌ってしまった)。今日のテーマは5月30・31日の定期演奏会で演奏された、ラヴェル作曲の「ダフニスとクロエ」。

しかし歌いながら、ふと考える。ワークショップは普段、子供たちやファミリーなどのために行われることが多く、ご年配の方も多い年齢層が集まっている今日の光景が、実に不思議だ。そして「ダフニスとクロエ」という、実に魅力的な作品ながらも決して“初心者にやさしい曲”だとは思えない選曲。もちろん『オケのテイキは、おもしろい』と題されているように、定期演奏会をより楽しむためのワークショップではあるのだが……。

■「やることで学ぶ」がカギに

しかしそんな疑問も、時間がたつにつれてどんどん吹き飛んでいく。ラヴェルの音楽に近づくため、モネの絵画を見ながら風景の中に潜む光のイメージを考えたり、5音階(ペンタニック・スケール)という楽譜上のしくみが紹介されていく中、いよいよ実践へ。「みんなで夜明けの雰囲気を作ってみましょう。ラヴェルが美しい夜明けの音楽を書いたようにね」というマイケルさんの呼びかけに始まり、参加者は3つのグループに分けられた。



クロード・モネ 印象・日の出 1872年

あるグループは暗闇の中からゆっくりと太陽が昇っていくイメージを、別のグループは森の中で味わうような大自然の営みや息吹を、そしてもうひとつのグループは美しく変化していく光のイメージを担当。用意された多種多様な打楽器や、自らの身体を使った音、歌、擬音などを駆使して、いくつかの素材を作り上げていくのだ。

その変化を興味深そうに見回るマイケルさんは「大人の場合、時として豊富な知識が自由な発想をじゃましてしまうこともありますし、好奇心や勇気をもって何かを壊すことを忘れてしまいがち。



太陽が昇っていくイメージを創作する参加者たち

でも今日の参加者は創造的です。ラヴェルが生み出した夜明けの音楽は奇跡に近いものですが、作曲は困難の連続でした。その過程や心情をみなさんにも共有していただき、音楽の内側に入ってきて欲しかったのです」と満足の様子。

マイケルさんとは何度もワークショップを行ってきた楽員たちがアドバイスを与える中、およそ1時間後には3つのグループそれぞれが作り出した素材を合体。合同演奏で生まれた3分ほどの「日本フィル版・夜明け」は、不思議なワンダーランドに迷い込んだかのような音世界となった。ワークショップ体験後の参加者からは、ラヴェルの音楽について「万華鏡のようなイメージだと感じた」「これは色を感じて聴く音楽なのですね」といった意見が寄せられたことも興味深い。

「キーワードは『Learning by Doing』、つまり『やることで学ぶ』。まだまだ試行錯誤は続きますが、可能性と確信は得ました」と語るマイケルさん。聴講スタイルではなく体験型のワークショップは、難しいと思われがちな曲であっても、その先入観を溶かしてしまう力を持っているのだろう。さて、次の『オケのテイキ…』は6月の東京定期演奏曲に美大生たちがチャレンジ。詳細は次号で。